

## 京都市指定文化財長楽館の附指定長椅子の修理について

千木良 礼子

長楽館の附指定となっている長椅子の座面の皮に割れが目立つことから、今回、座面の貼り換えをすることとなった(図1)。施工は株式会社シバハラが実施した。

クッション材は、当初は馬毛と思われるが、すでにウレタンとなっていた。長椅子は1階広間にて普段からよく使用するものであるため、今回も、同様のウレタンを使用することとした。クッション材の変遷については、昭和40年代より馬毛と藁からウレタンに変わっていった。現在、馬毛は手に入りにくいものであるが、馬刺しを食べる地域だと手に入りやすいそうである。また、馬毛と一緒に入れる藁は雨ざらしにすると虫がわくため、雨天時は取り込むなどして乾燥させる必要があり、手間がかかるものであるとのことである。

座面の皮はタッカーで固定されていた(図2)。タッカーは昭和40年後半(マックス株式会社は47年より販売)使用され

るようになるが、それまでは三分釘や五分釘を使用していたという。今回の長椅子には釘が1回分、タッカーが1回分の穴の痕跡があり、過去に2回修理されていることが分かった。

座面のバネは、もともとは丸バネが用いられたと思われる。現在関西において、当時の高い技術で丸バネを施工した場合、30年程度の耐用年数があるとされるが、この施工が可能な職人は5名程度とされる。タッカーと同様、昭和50年代頃から丸バネから現在のSバネに移行していった。Sバネから一時期ウェービングテープに移行するが、ウェービングテープのみだと延びてしまうため、現在ではSバネに補助的に扱いとして用いるケースが増えてきたという(図3)。

座面の皮は、前回の修理時のもので、厚みが1mmで隅部は折り曲げて仕上げられていた(図4)。通常、日本は1mm厚、フ



図1 修理前の長椅子



図2 タッカーで固定された座面の皮

ランスやイタリアは3mm厚の皮を用いる。1mmであれば折り曲げがしやすく、一方3mmの場合はたたいて伸ばすことで隅部を仕上げているという。皮は年に1回油を塗ると長持ちする。水分を含む皮の表面に油の膜を作ることで、水分が抜けるのを防ぐ。取替時期は20年でひび割れが目立つようになる。動物の血管があった位置からひび割れがしやすくなるという。

座面を外すと中に平成元年の新聞紙が入っていた(図5)。この時期に一度修理をしていると思われる。また、背面下部はふさがれておらず、壁面が見えていた。壁面

は化粧仕上げにはなっておらず、躯体がそのまま見える状態だったため、この長椅子は明治42年(1909)の建築当初に、作り付けとして設えられたことが分かる。

躯体と家具背面の間を撮影すると、大日本麦酒の新聞チラシがあることが分かった。大日本麦酒株式会社は1906年に設立している。

以上、簡単であるが、修理から分かったことを報告した。

なお、長楽館は令和6年12月9日付で重要文化財建造物となった。修理は重文指定前の市指定時に実施されたものである。

ちぎられいこ  
千木良礼子(文化財保護課 文化財保護技師(建造物担当))



図3 座面の裏側



図4 クッション隅部



図5 座面の内側



図6 完成